

万葉集における梅の歌考

二十八回生 重留妙子

序

万葉集には多くの植物が素材として用いられているが、中で梅は集中に一二〇首詠歌がみられ、これは萩の一四一首に次ぐ数となっている。一方、桜の詠歌は四十二首で梅の約三分の一にしか満たない。

平安・中世の時代にあつては、花といえればそれはそのまま桜を指すほど、桜は百花の中で最も人々に愛好されていた。そして現代においても尚その愛好は変わるところがない。ところが、先に示した如く万葉集を見る限り梅と桜の愛好の程度が逆転していたかのような様相が詠歌数の上に表われている。詠歌数だけから判断すると、万葉の人々は桜よりも梅を愛好していたかのようと思われるが、果して実際そうであったのだろうか。そしてもしそうでなかったのなら、なぜに一二〇首もの多くの梅の歌が万葉集において詠まれることとなつたのであろうか。

私は以上のような疑問を端緒として、万葉集の梅の歌に關して考察していこうとするものである。すなわち、まず

第一章では第二章以下の前提として、万葉集の梅の詠歌数について検討し、梅の生態に触れる。第二章では万葉集の梅の歌の特徴を探ると共に、梅の歌の多い原因について考察する。そして第三章では、巻十の四季分類の巻における梅の歌の分類意識について探ってみる。

本論

第一章 梅の詠歌数と梅の生態（略）

（概略）

本章ではまず万葉集の梅の詠歌数を一二〇首と決定した。これは万葉集総数の二、六六%にあたる。各巻ごとの詠歌数は左表の通り。

4	卷2
1	卷3
3	卷4
37	卷5
2	卷6
23	卷8
30	卷10
6	卷17
2	卷18
8	卷19
4	卷20
120	総計

また、梅の生態に関しては、特筆すべきは、梅が中国原産の植物であり、日本へ渡来したのは藤原京頃であった点が挙げられる。

第二章 梅歌の特徴と梅歌の多い原因

第一節 梅歌の特徴

万葉集において梅はどのように詠じられているのだろうか。そしてそこにはどのような特徴が見出されるだろうか。本節では、梅歌を素材をはじめその他いくつかの角度から見ていきながら、古今和歌集の梅の歌と比較しつつそれらを探っていきたい。

まず、古今集の梅歌について少しふれておく。古今集では梅は三十首詠まれている。これは総歌数の二、七パーセントにあたり、割合の上では万葉集と大体同率である。梅は桜に次いで多く詠まれている植物であるのだが、その数は桜の半数にも満たないのである。

さて、次より梅歌の中の梅以外の素材を見ていってみよう。両集とも数の多い順に表にまとめてみた。

万葉集で一位となっているのは雪である。梅の開花期と降雪の時期との时期的な重なりは大きいとはいえず、古今集をみると雪は四位五例であり、割合としても少ないから、万葉集で雪との詠み合わせの多い事は一つの特徴として挙げられるだろう。実際の歌を見るに

〔表1〕万葉集

10	7	6	5	4	3	2	1	順位
3	4	5	6	7	12	13	31	数
恋岡里野	夜雨霞	月	風	山	柳	鶯	雪	素材

		20	14	順位
		1	2	数
繩旅松	霧都夢	標涕竹	天桜鳥	素材
裏社磯	酒(香)霜	日蔭垣遊び	酒杯袖露	

〔表2〕古今集

6	4	2	1	順位
3	5	6	13	数
夜	雪袖	鶯(色)	(香)	素材

			8	7
			1	2
鏡糸	恋柳天	かたみ里かざし	山月川	笠

卷5
822

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れく
るかも

卷8
1640

わが岳に盛に咲ける梅の花残れる雪をまがえつる
かも

卷8
1645

わが屋前の冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見
つるかも

卷8
1649

今日降りし雪に競ひてわが屋前の冬木の梅は咲き
にけり

梅の花の散り乱れるのを雪の降りくる様に見たてたもの、
残雪の庭に盛に咲く梅の情景、降る雪を梅の花に見たてた
もの、雪に競って咲く梅など、その他様々である。

それら三十一首を次の三つに大別してみた。

(A)梅の花の散るのを降雪にたとえたもの

(B)降雪を梅の花の散るのにたとえたもの

(C)たとえを含まず雪と梅が並列的に詠まれたもの

〔表3〕

(B)	(A)	
1642	822	国歌大観番号
1645	839	
1647	844	
1841		
3906		

(C)		
4287	1651	823
	1833	849
	1834	850
	1840	1426
	1842	1434
	1862	1436
	2329	1445
	2344	1640
	4134	1641
	4282	1648
	4283	1649

(A)はいづれも大宰府での梅花の宴で詠まれたものである。
(A)の歌い方について古沢未知男先生は「多分に中国文学の
影響下に成ったものである」と述べておられる。ならば、

(A)とは逆の見立てである(B)の歌い方も同様に考えることが
できるのではなからうか。(A)・(B)の歌い方は古今集には一
首もみられない。(A)・(B)は中国文化の影響を多分に受けて

いた大和・奈良時代ではの、そして中国文学から受けた影
響の大きい万葉集ならではの歌い方なのである。(A)・(B)

以外の見立ての歌は万葉集には一首もない。(C)については、
そのほとんどが梅の花と雪とが共にある情景を詠んだもの

である。
さて、万葉集で雪に次いで詠み合わせの多いのが鶯であ
る。「梅に鶯」は後世では類型的な取り合わせとなってい
るが、万葉集にも十三首ほど詠まれている。しかし古今集
の六首と比べると割合としては凡そ半分であって古今集の
方によりその傾向はみられるのである。

卷5
827
春されば木末隠れて鶯を鳴きて去ぬなる梅が下枝
に

鶯に次ぐのが柳で十二首ある。古今集になると一首と大
幅に詠み合わせが少なくなり、古今集以下の八代集でも、
後拾遺集に一首あるだけで他の歌集には一首も詠まれてい
ない。梅と柳の詠み合わせは万葉集に特徴的なものとみら
れる。

卷10
1904

梅の花しだり柳に折り雑へ花にまつらば君に逢は
むかも

さて、ここで梅との詠み合わせで数の多い雪・鶯・柳それぞれについて、万葉集中の例歌を拾ってみると、雪一四首（うち長歌十八首）、鶯五十一首（うち長歌六首）、柳三十六首（うち長歌二首）である。そしてそれぞれの例歌の中の素材を調べてみて次のような結果をえた。

〔表4 a〕 雪

順位	1	2	3	〃	5
素材	梅	山	野	嶺	鶯
数	31	27	9	〃	7

〔表4 b〕 鶯

順位	1	2	3	〃	5
素材	梅	野	山	雪	霞
数	13	8	7	〃	6

〔表4 c〕 柳

順位	1	2	〃	4
素材	梅	鶯	道	風
数	12	3	〃	2

(注)

長歌はその長さによって素材がいくつもできて、これを短歌と同様に扱うと不均衡が生じるため、それぞれ長歌は省いて調査した。

表4に明らかなく、雪・鶯・柳ともに梅が最も多く一緒に詠まれていた。降雪の時期、鶯の「ホーホケキョ」と鳴く時期、柳の芽ぶく時期が梅の開花期と大体重なることから、これらが梅と共に一首中に詠み込まれる確率は当然高くなると思うのだが、雪・鶯・柳共に梅が一位というのは、時期的な重なりだけが関係しているのではないのではなからうか。すなわち、作歌の際に、梅といえど、雪・鶯・柳が作者の脳裏に浮かんでいて、言葉を変えれば、

「梅に雪」、「梅に鶯」、「梅に柳」といった詠歌の類型化が生じつつあったとみることができるとはなからうか。

そもそも詠歌の類型化は古今集以降に大いに認められるところであって、その前兆が梅歌にも見られるということは梅歌が古今集に近い性格を持つものとして、すなわち、題詠の要素を持ち生活から切り離された風流趣味の上に成り立つものであると考えられ興味深い。

雪・鶯・柳以外にも梅歌に詠み込まれた素材は多いが、それらについては表に示しただけにとどめておく。

5 素材をはなれて頻用されている語に「挿頭す」があり、
 卷 827 人毎に折り挿頭しつつ遊べどもいやめずらしき梅
 の花かも

右の歌の他合わせて十一首ある。梅を挿頭すという行為は、宴席・遊びと関わりが深い。宴会を催し梅や柳を挿頭しにして遊ぶのは風雅人たちのこの上ない楽しみであったようである。宴席で歌われた梅歌は多く、記録に残っているものだけでも、大宰府での梅花の宴の三十二首をはじめとして総数四十五首に及ぶ。宴席歌は題詠の要素を多分に含むものと思われ、宴席歌が多いという事実は先に述べた梅歌の詠歌の類型化と結びつけて考えられるところでもある。

第二節 梅歌の多い原因

本節では桜歌を参照しつつ、作者と作歌時期を通して万葉集に梅歌の多い原因について考察してみる。

梅歌一二〇首のうち三十三首は作者未詳歌である。残る八十七首が作者が判明しているわけであるが作者数は六十名となる。作者の大半が貴族階級・知識階級の人々であって、藤原八束・石上宅嗣・吉田宜らの上級貴族、大伴旅人家持ら大伴一族・旅人の大宰府管轄下での諸役人などで占められている。また作者未詳歌であってもそのうちの三十首が収められている巻十は、「風流をたのしむ傾向の歌・繊細な感じの歌・類想・同型の表現・中国文化の影響などが相当量見出される点からして、当代知識階級の一般的水準の作が主となっていると思われる」^{注1}巻であるから、そのほとんどが知識階級の人の手になるものと考えられる。

大伴家持（八首）、旅人（七首）、書持（六首）の三人が梅歌の数が多いが、彼らの作歌状況からみて、その数字の高さが梅の花の愛好の強さを意味しているとは考えられない。また、桜歌と梅歌の共通の作者である家持・山部赤人らの歌を比較してみても、桜歌と梅歌の全体を比較してみても、桜と梅とに愛好の程度の違いというものは伺われない。よって万葉集に梅歌が多い原因は、愛好ということにはほとんど求められないのではないかと考えられる。

次に梅歌・桜歌の作られた時期であるが、製作年代の明らかかな歌を万葉集四期分類にあてはめると表5の如くなる。梅・桜共に第一期に詠歌はなく第三期第四期に集中して詠まれている。梅が第二期以前に詠歌がないのは梅の渡来したのが藤原京頃（六九二〜七一〇）で、まだ人々の目に触れられていなかったことによる。

桜は日本固有の植物であるから、第二期以前にも、もう少し詠歌があつてしかるべきと思われるが、それが無いのは人々の自然観に万葉前期と後期とは変遷があることに一つの要因があるのだと思われる。

〔表5〕

作者未詳歌	計	時代区分				梅	
		第734 四期759	第711 三期733	第673 二期710	第629 一期672	作者数	歌数
	60	18	42	0	0	作者数	梅
33	87	34	53	0	0	歌数	
27.5	72.5	28.3	44.2	0	0	$\frac{\text{歌数}}{120} \times 100$	
	13	5	7	1	0	作者数	桜
13	29	11	14	4	0	歌数	
31.0	69.0	26.2	33.3	9.5	0	$\frac{\text{歌数}}{42} \times 100$	

すなわち、上代においては人々は自然に即して生活しており、自然は畏怖の対象としてあり、花の美など深く問われることはなかった。しかし、このような自然観も時代が

下ると次第に後退する。律令国家の繁栄により貴族・官僚は剰余生産物によって生活できるようになる。自然との対決から遠ざかった彼らにとって、自然は愛玩すべき対象となるのである。そして漢詩文の影響も相まって自然の美に目が向けられ、愛花思想が盛んとなる。万葉集第三期はちょうどこの時期にあたっていた。しかして、第三期以降、桜や梅といった観賞用の植物が歌に詠まれることが多くなるのである。

さて、万葉集において梅が桜などよりも多く詠まれている原因であるが、一つには梅が主に庭園に植えられていた植物であったがために、山野に自生していた桜などよりも、貴族階級、知識階級の人々にとっては、より親しみやすい植物であって自然、梅を詠む機会も多くなったであろうことが考えられる。

第二に、梅が中国渡来の植物であって、貴族たちに非常に珍重され、また、梅は当時の日本があらゆる面で模範としていた中国の人々に愛好されていて、詩文にも多く詠まれているという認識が、貴族たちに梅を歌に詠まんとする姿勢をつくったであろうことが考えられる。

更には、梅歌の多いことには貴族たちの精神が関わってくることも大きいようである。すなわち、律令国家の繁栄により、生活の余裕、閑暇を手にした貴族たちは、気分が享楽耽美の傾向になり、風雅な生活を求めて社交遊宴の機会を多く持つようになるのである。そして時、春であれば、風流な遊びの最たるものは梅の花の咲き散る庭園で、

酒宴を催すことであった。そこで貴族たちは梅の花を觀賞し、梅の花に托して風流な気分を歌に詠んだりしたのである。

以上述べた如く、万葉集に梅歌が多いのは簡単に言ってしまうなら、貴族階級・知識階級の人々が梅を詠む機会というものが多かったのだということになる。そして機会を多くした要因として、梅の生態上の特徴や中国文化の影響・貴族たちの享楽的精神などがあるのである。

また、万葉集の梅歌の数をふくらませているのが、「梅歌調卅二首」とこれに追和する歌十一首であることを第四点としてつけ加えておく。

第三章 卷十における春の部と冬の部の梅歌の分類意識

万葉集卷十は、歌を四季に分ち、それぞれの季を更に雑歌と相聞とに分類している。卷十と同じく四季分類のなさを排し、ほとんどの歌が作者未詳歌で、作歌事情・作者年次に関しては極めてわずかな記載を有するのみであるのに対し、卷八は作者が示され、時々作歌事情及び作歌年月も記されている。

両巻において梅歌は春の部と冬の部に分けて入れられており、それは表6に示す如くである。卷十では春に冬の倍以上詠まれているが、卷八では逆に冬に春の倍近く詠まれ、両巻を合わせると春の方が五百多くなっている。

〔表6〕

計	十		八		巻部類
	春相聞	春雑歌	春相聞	春雑歌	
29	5	16	1	7	数計
	21		8		部類
24	冬相聞	冬雑歌	冬相聞	冬雑歌	数計
	3	6	4	11	合計
53	30		23		

しかるに、巻十・巻八共に冬の部に入れられた梅歌をみると春の部のそれと大差ないものが多いのである。例えば次の如くである。

巻10 冬雑 誰が園の梅にかありけむ幾許も咲きにけるかも見が欲しまでに

巻10 春雑 梅の花降り覆ふ雪をつつみ持ち君に見せむと取れば消につつ

春の部の梅歌と冬の部の梅歌とをどのような基準でもって分類したのか疑問のもたれるところである。よって本章においては巻十における梅歌の分類意識について探っていくたいと考える。

巻十は作者未詳の歌の中で四季歌に関する歌を集めて編まれたものと考えられている。梅歌は、作歌年月の記され

〔表7〕

春相聞			春雑歌					部類	
寄松	寄雨	寄花	野遊	詠花	詠柳	詠雪	詠鳥	項目	
$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{4}$	$\frac{3}{9}$	$\frac{1}{4}$	$\frac{8}{20}$	$\frac{1}{8}$	$\frac{5}{11}$	$\frac{1}{13}$	梅歌	
								項目総数	
1922	1918	1900 1904 1906	1883	1854 1856 1859 1862 1871 1873	1853	1833 1834 1840 1842	1820	歌番号	

冬相聞			冬雑歌		部類	
寄花	寄雪	寄露	詠露	詠花	項目	
$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{12}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{5}{5}$	梅歌	
					項目総数	
2349	2344	2325	2330	2325 2329	歌番号	

ているものはなく、またすべてが作者未詳歌であるから、たとえ集中に記載はなくても編者には作歌年月が明らかであったような可能性もほとんどないのである。

分類意識を知るための手がかりとするために、まず右表にあげた項目がどの季節に設けられているかを調べた。そして更に、鳥、雪、柳などの素材がどの季節に詠まれるものであるかを巻十と巻八とを合わせて調べた。その結果

(詳細は割愛する)「詠鳥」、「詠柳」、「詠露」、「野遊」、「寄雨」、「寄松」、「寄露」、「寄雪」の項目に収められている歌は、梅以外の素材によってその分類の違いを判別できなかった。

〔表8〕

1838	1837	1836	1835	1834	1833	1832	歌番号	春部		
雪・(春)	鶯・(春)雪	雪・霞・(春)	雪・(春)	梅・雪	梅・雪	(春)雪	素材	詠雪		
2324	2323	2322	2321	2320	2319	2318	2317	2316	歌番号	冬部
雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	素材	詠雪

1873	1871	1862	1859	1858	1857	1856	1854	歌番号	春部
鶯・梅	(春)梅	雪・春霞・梅	梅	鳥・梅	梅・(春)	柳・梅	鶯・梅・桜	素材	詠花
			2329	2328	2327	2326	2325	歌番号	冬部
			雪・梅	梅	梅	梅	梅・月	素材	詠花

1906	1904	1900	歌番号	春部
梅	梅・柳	梅	素材	寄花
		2349	歌番号	冬部
		梅・月	素材	寄花

「詠雪」、「詠花」、「寄花」についてはこれまでの調査では分類意識を解明できない。従って次に項目ごとに春の部の歌と冬の部の歌を比較してみたところ、表8のような結果がえられた。

これらの表は「詠雪」については、春の部と冬の部の項目のすべての歌をとりあげて、「詠花」と「寄花」は梅歌だけをとりあげて、季節に関する素材だけを挙げたものである。

「詠雪」では表8に示す如く、春部と冬部とは明らかに違いがある。すなわち、春部の歌では「雪」と共に「春」もしくは春を意味する語が詠み込まれているのであるが、冬部の歌では雪以外には季節に関する語は詠まれていないのである。

「詠花」でも類似した状況がみられる。春部の歌では、「梅」以外にも春を意味する語が必ず詠まれているのである。但し一八九九番歌は例外である。冬部では、梅以外

の季節関係語に月と雪が挙げられているが、月は四季にわたって詠まれている語であって、春を意味する語とは見なされえないし、雪も又同様である。

以上のように、「詠雪」と「詠花」には冬部の歌と春部の歌に、素材と語の上で歴然とした違いがみられる。ところが、「寄花」にあつてはその違いが判然としない。

一九〇四番歌は「柳」が共に詠まれていることから春の歌と断定できるのだが、残る一九〇〇・一九〇六・二三四九番歌は判別できかねる。しかしながら、「寄花」の分類基準こそ知りえないものの同項目の下の春部の歌と冬部の歌は一定の基準でもって分類がなされているとみなすことができるのではなからうか。

項目を無視して、単に春部の梅歌と冬部の梅歌とを比較すると、なぜにかく分類がなされたかあやしまれる歌も、項目ごとと眺めると春部と冬部の歌の違いが判然としてくるのである。

以上、三章において見てきたことを考え合わせると次のようなことが仮定される。すなわち、まず、巻十の編者は手元に集められた作者未詳歌の中の四季歌を雑歌と相聞とに分類し、次に一首の歌それぞれを主眼が何にあるかということを考えて、詠物・寄物の項目ごとに分け、最後に四季の分類を行ったとみるのである。巻十の編纂がこのような順序で成されたと考えられることでのみ、すべての梅歌の分類意識を説明づけることができるようになる。

結 び

以上、万葉集の梅歌に関して、詠歌数やその特徴、梅が多く歌に詠まれた原因、更には巻十の梅歌の分類意識などについて考察してきたわけである。

梅は藤原京頃日本へ輸入され、主として貴族階級の人々の庭へ植えられた。このような事情から万葉集の梅歌はすべてが第三期以降に詠まれているのであり、作者もほとんどが知識階級の人々となっていると思われるのである。

梅との詠み合わせの多いのが、雪・鶯・柳であった。そしてこれら三素材と梅との詠み合わせは類型化に近い状態にあつたと考えられた。

万葉集に梅歌が多いのは、梅が身近な親しみやすい植物であつた上に、当時の中国文化の影響や貴族たちの享楽精神などが相俟つて梅が風雅の好対象となり、必然的に歌に詠まれる機会が多くなつたことによるところが大きいと考えられる。また「梅歌調卅二首」と追和歌十一首の歌の存在は梅歌の数を多くした要因であつた。

第三章における、巻十の梅歌の分類意識についての考察では、梅と共に詠み合わされた素材を中心にみていった。そしてその結果、編纂が雑歌と相聞の分類↓詠物・寄物による分類↓四季分類の順序で成されたものと考えられることと春部と冬部の梅歌の分類を説くことができるとした。

注 1 日本古典文学大系万葉集二の解説より引用